中近世ブリテン島における妖精伝承の中のブラウニー

八尾 竣介

世界各地に伝わっている数多くの伝承の中には、神秘的で幻想的な存在が登場する。現在までブリテン島に残る伝承の中にもそのような存在が「妖精」として多種多様に登場している。その中でも、家憑き妖精の一種である「ブラウニー」は、現代では発祥地のブリテン島を超えて世界各地へと広がり、様々な創作の中で息づいている。従来の研究は過去数百年の逸話の分析を通じて今日の「伝統的」ブラウニー像形成の過程を明らかにしてきた一方、伝承の過程で捨象されたブラウニー像に焦点を当てた検討はなされてこなかった。しかし捨象された像は、それらが語られていた時代・地域における社会を知る手がかりとなるとともに、現在では失われた多様なブラウニーの姿を知るために重要である。そこで本研究では、ブラウニー伝承の過程で捨象された要素に着目しながら、「伝統的」ブラウニー像が形成された過程を中近世まで遡って明らかにすることを目的とし、中近世の 7 つの史料から抽出したブラウニーについての計 16 の逸話、8 の言及を 6 つの論点（容姿、性格、家への従属性、最後、住処、特異性）に絞って分析、考察を行った。その結論は以下の通りである。

ブラウニー像の形成にはキリスト教の影響が特に大きかったと考えられる。初期の逸話では幸運の象徴といった特徴が前面に押し出されていたが、キリスト教の影響によって捨象され、悪魔的な特徴が付与されるようになった。しかし一方で後者の特徴も、現代に向かうにつれて薄れていくことが判明した。個別の論点においては、「容姿」は言及されないことも多かったが、初期の原始的な姿は次第により文化的なものへと変容しており、「性格」は気難しい性格が多く、現代にも残っているいたずら好きといった面が見られるが、現代のように二面的でなく、それぞれ独立しており、品行重視、内向的、勇敢、性急的といった特異的な性格も見られた。「家への従属性」という観点からは、家に忠実的に働くことが多いが、強制的な従属や神命による人間の救済といった特異的な特徴も見られた。ブラウニーの「最後」は、何かを貰って去るという形式が一般的であるが、現代では見られない、悪魔祓いによる追放、仕事を指摘された不満による出奔といった形式で終わるものが存在していた。ブラウニーの「住処」は、明確なものは少ないが、基本的に人のいるところに住んでいる一方で、荒涼とした孤独な場所という特異的な住処も存在した。また、「特異性」として、先に挙げた幸運の象徴が、現代では捨象されている重要な点として注目される。

本研究の成果は、従来のブラウニー伝承の研究で触れられてこなかった像の捨象に着目することで、ブラウニー像の形成、捨象にキリスト教が大きく影響していること、その影響以外で捨象されたと考えられるいくつかのブラウニー像の要素を明らかにしたことである。本研究で得られた知見は、ブラウニー伝承の新たな側面を提示するとともに、今後の新たな創作のモチーフを提供することが期待される。

（指導教員　村田 光司）